

第2話 究極の蔵書整理術

古本、および蔵書については、ずいぶん取材を受けた。そのたびに「どうやって蔵書を整理されているんですか？」というような質問が来る。自宅の書斎兼書庫で取材を受けた場合は、「見ての通り、まったく整理なんかできていません」と言えるが、喫茶店などで話をするときには、どうやって言い逃れるか苦心する。

整理術うんぬんを語れるのは、5000冊ぐらいまでの蔵書の場合だろう。1万冊を超え、2万冊に手が届く頃には、家一軒をすべて本のために使うぐらいの潤沢なスペースを持たないかぎり、整理どころではないというのが正直な話。

こうなると結論は決まっています、捨てるか売るかして数を減らすしかない。それ以外に、ていどのいい「整理術」などないのだ。

引越しこそ処分の最大の好機

これまでも金に困って、あるいは引越しのたびに、大量の整理、つまり古本屋さんに来てもらって本を売ってきた。引越しはもっとも、自分のなかで本を処分する決意を納得させやすい理由になる。そう、本を売る時は、ほかの誰であろう、自分で自分を説得する必要がある。

大学の教師のように、研究費をもらって、年度末にはそれを消化するために目録からバカスカ注文し、研究室の書棚に収める……などというのとはわけが違う。貧乏学生だった時のことをよく思い出すが、月々の生活費のなかから、生存するぎりぎりの分を確保し、それ以外はなるべく本のために使うのが理想だった。

次のバイト代が入るまで、ここまでは使える、今月はちょっと厳しいなどと、国家予算に比べたらスケール極小のラインで、だましだまし古本代につぎ込んできた。蛇口をひねれば水が出るように、潤沢な資金があって、後顧の憂いなく本が買えた時代など、20代、30代に一度もなかったのだ。

新刊書店と古本屋の本棚の前で、煩悶しながら「これはどうしても買っておこう」と決意した上で求めてきた本ばかりだ。それが溜まりたまって、まとまった量の蔵書となる。蜜蜂がせっせと花と花の間を飛び回って、どうにか集めた蜜みたいなものだ。事情が許せば、買った本は全部そのまま残しておきたい。それが本音だ。

ところが、もちろんそうはいかない。振り返ってみて、いまの家に落ち着くまでに、もっともスペース的に王様の気分を味わえたのが、20代の後半に、2年程住んだ滋賀県大津

市の一軒家。庭付き 2 階建て木造家屋に 1 人で住んでいた。1 階が 3 畳と 6 畳、2 階には 3 部屋あった。これが使い放題。思う存分、本が置ける状態だった。

1990 年春に大阪から上京してきたときも、普通は夫婦や家族で住むような 2LDK を最初の住処として、このときも気にせず本を溜め込むことができた。

しかし、あとは学生下宿や、古いワンルームマンションなどで、スペースに限りがあったから、引越しとなると、まず処分するのが本ということになる。すべて、あそこの古本屋、ここの古本屋と渡り歩きながら、1 冊 1 冊買い集めたものばかり。いつも眺め、取り出し、ときになでさすってきた本たち。それが、売られていく日は、飼っていた子牛を手放す酪農の一家の気分だった。

蔵書は健全で賢明でなければならない

それでも、やっぱり本は売るべきなのである。スペースはお金の問題だけではない。その時点で、自分に何が必要か、どうしても必要な本かどうかを見極め、新陳代謝をはかる。それが自分を賢くする。蔵書は賢明で健全でなければならない。初版本や美術書など、コレクションとしていいものだけを集め、蔵書を純化させていくやり方もあるだろうが、ほとんどの場合、溜まり過ぎた本は、増えたことで知的生産としての流通が滞り、人間の体で言えば、血の巡りが悪くなる。血液サラサラにするためにも、自分のその時点での鮮度を失った本は、一度手放せばいい。

と、悟ったようなことを言えるようになったのは、じつは、今年秋に、身を削るような蔵書の処分をしたからだ。今年は春にも一度、2000 冊ほど思い切った処分をしている。気心の知れた、信頼する古本屋さんに来てもらったので、カスばかりをつかませるわけにはいかない。けっこうがんばって、痛みを感じる本も放出した。少し血が流れた気がした。

二度目の今回は、さらに血を流す必要があった。それは、2000 冊減らしたことでわかったのだが、処分した後の書庫の風景を見ると、ほとんどまったく変わっていない。減らした甲斐がまったくない、ということ。

そのとき思ったことは、「お宅にいったい、どれくらい本があるのですか？」という、庭に何本の雑草が生えているのですかと聞くに相当する、ムチャで返答不可能な質問に、それでも「ざっと 2 万冊」と答えてきたが、2000 冊減らしてビクともしないところを見ると、どうやら 2 万冊ではきかない、ということだった。

ホットドッグでもハンバーガーでも、アイスキャンディーでもいいが、10 分の 1 を食べれば、あきらかにもとの姿とは違うのがわかる。その「あきらかにもとの姿とは違う」実感がこのとき、なかった。となると、下手をすると 3 万冊ぐらいあるのかもしれない。年に 1000 冊の本を触るなり、読むなり、一部を確かめたりしたとしても、すべてを触り終わるには 30 年かかる。これからも本は増えていくに決まっているし、いくらなんでも、

それは健全ではないだろう。

それに、税金のことや、住宅ローンの支払いや、教育費や諸々、頭の痛い金銭上の問題もあった。前回、2万冊売って得たお金で、少しは助かったが、すぐに消えてしまう程度のもだった。いや、それでも来てもらった古本屋さんは、おそらく誠実に、払える範囲の最高額を払ってくれたのだ。同じ量を「ブ」のつくチェーンの新古書店へ持ち込んでも、どうだろう、その10分の1も支払われなかったに違いない。

何かの手違いで、同じ本が、その「ブ」のつく店へ売られてしまったと後で知ったとしたら、私はショックのあまり、1週間は寝込んで、以後しばらく立ち直れないだろう。ホンの価値を知っている店と、そうでない店に売るとでは、天地の開きがある。

欲しい本は全部持って行って

まあ、それはそれとして、まとまったお金を作るために、今回の処分を立てた方針は、件の古本屋さんに欲しい本を、どんどん抜いて持って行ってもらう、ということだった。その決意表明のために、事前に、田中小実昌、殿山泰司のコレクション（といっても併せて十数冊）を始め、平凡社ライブラリーを40冊ほど、入手困難を含むプロティガンの揃い、大好きなシリーズみすず書房の「大人の本棚」、ハヤカワ文庫の鈴木いつみ2冊など、動脈に近いところをどんどん抜き出しておいた。

あとは、来てもらってから、「いいから、どんどん抜いて言って」と告げて、私はパソコンに向かったまま振り向きもしなかった。ときどき「講談社文芸文庫からも、いいですか」「いいよ、中公文庫もちくま文庫もいいのがあったら持って行って」、文芸書の棚では「小沼丹はどうします?」「いいから、何でも持って行って」とクールに告げた。なんてかっこいいんだ。

じつは、ここで告白すると、地下の書庫から一階のリビングに運び出してから、最後に一度、私がざっと点検すると告げてあったのだ。最後の切り札はこちらが握っているからの余裕だった。いくらなんでも、好き放題持っていかれるのは心臓に悪すぎる。これだけはどうしても、と思うものを1割ぐらい、書庫に戻すつもりでいた。しかし、考えを改めた。そんなことをすれば、おそらくどんどん後悔と欲が出て、けっきょく3割ぐらいは戻すことになるだろう。それでは「欲しい本を持って行って」と言った甲斐がない。「男だろう、お前は」と自分に言い聞かせ、荒川洋治さんの詩集以外は、目をつぶってスルーさせた。本を処分するのに一番必要なのは「勇気」である。

山田稔も川崎長太郎も上林暁も木山捷平も永井龍男も尾崎一雄も、平凡社「モダン都市文学」シリーズも、こうしてみごとに消えていった。それにしてもさすがだ。いちばん痛い急所を、もののみごとに捉まえて、某古本屋は抜いていった。

蔵書の買い取りに出かけて、好きな本だけ持って行っていい、という虫のいい話はそう

はないらしく、補助としてついてきた店員と2人、本棚を前に気合いを入れて抜いていく姿が、はずんでいるようだった。

覚悟を決めての処分だから、後悔はないつもりだった。しかし、彼らが去ったあと、初めて抜かれてスペースの空いた棚を見て、しばし茫然となった。空いた場所に、どんな本があったかは、もちろん覚えている。かすり傷のつもりでいたが、どうやら大量の血が流れたとそのとき知ったのだ。

繰り返すが、前述のひいきの作家たちの著作は、どれもこれも、若い時から一冊一冊、古本屋や古本市に足を運び、大阪に住んでいるときは、夏休みに東京まで遠征し、それなりの感激と出費を伴って集めた本だ。それぞれの本に思い出もある。古書目録に並んだそれぞれの作家の本を、あり余った金でまとめて注文を出したというのではない。

空いた本棚が、そのまま自分の心の空虚を表すようで、じわじわと哀しみが沸いてきた。これは、前回の2000冊処分するときにはなかったことだ。売った量は、今回の方が少ない。ざっとだが、単行本600冊、文庫600冊のしめて1200冊と踏んでいる。しかし、痛みが違う。平気のはずだった心が、想像以上にダメージを受けていることがわかった。

売った翌日、また買った

一夜明けて、翌日は都心に出る用事があって外出したが、あきらかに身を斬られた余韻は残っていて、なんだか一日変だった。電車の席に座ってからも、気がついたら大きく溜息をついていて、ときおり、体を揺るように動かす。隣に若い女性が座っていたが、あんまり拳動が不審なので、途中で立って、ほかの車両へ移っていった。申しわけないことをした。

気をしっかり持てよ、と自分で励まして電車を降りたのだが、その日は毎週1度通っている竹橋・毎日新聞社での仕事。いつも御茶ノ水で降りて、神保町を通過して行く。たいいてい新刊書店と古本屋街を散策するのだが、やはり心が虚ろだったのだろうか。前日、せっかく1200冊を処分したばかりなのに、あちこち引っかかって、17冊も古本を買ってしまった。バカだなあ、と自分でも思うが、この気持ち、わかってもらえる人にはわかってもらえるだろう。事実、17冊も買い込んで、ぶらさげる本の袋の重さが指に痛いほど伝わると、ついさっきまでの憂鬱がかなり和らいだのである。

自分でも可愛いな、と思ったのは、この日、筑摩現代文学大系の端本の1冊『田畑修一郎、木山捷平、小沼丹』の巻をさっそく買ったことだ。昨日、いまや古本屋でトップクラスの人気がある小沼丹を、小沢書店の作品集を始め、単行本も文庫もすべて失ったことで、その喪失感は容易に埋めがたかったらしい。

小沼丹は、井伏鱒二の弟子筋にあたり、吉行淳之介、遠藤周作、安岡章太郎、庄野潤三、島尾敏雄、阿川宏之などと同じ、第三の新人と呼ばれるエコーに属しながら、芥川・直

木賞も受賞していないし、地味な存在だった。この種の文学全集にも、ほとんど巻立てに入ることもなかった。たぶん、小沢書店が作品集を出し、作家の久世光彦がくり返し自分の文章で小沼丹について触れたことが機運になったのか、ここ 10 年ぐらいですこぶる人気上昇してきた作家だ。

3 人で一巻の全集端本ではあるが、ここには、「村のエトランジェ」を始め、「白孔雀のゐるホテル」、「懐中時計」、「銀色の鈴」など九編が収まっている。ありがたい一冊なのだ。小沼丹のとりあえずを知るにはまずはこれで十分。あとは、気になったとき、また買えばいいのだ。そう思うと気が楽になった。

これからはそうしていけばいい。何がなんでも、誰でもかれでも、あれもこれも買いそろえる必要はない。ツボとなる一冊を押さえて、それを熟読して、あふれる思いがそれでもあったら、領土を広げていけばいい。2011 年の春には 54 歳になる。丼飯をお代わりする年でも、駅の階段を一段飛ばしで駆け上がる年でもない。知的欲求の見栄も、だいぶ衰えた。蔵書の精選と凝縮を、そろそろ心掛ける年ではないか。

年内に、できればもう一回、同じ業者に来てもらって、前回と同程度、あるいはもう少し川底をさらって、処分するつもりだ。そのときはまた報告するし、買ってもらった側の、古本屋サイドの話も聞いてみることにしよう。